

[42] 第8回 世界バレエ・フェスティバル

～未来も描いたガラ公演～

1997年8月22日 東京新聞 夕刊

バレエ好きの人間にとって、世界バレエフェスティバルが開催される夏はほんとうに熱い。三年に一度のその公演がちょうど今年に当たっていて、これで八回目を迎えた。今回は世界の十六のバレエ団からベテランと新鋭のスター計四十人が集まって得意の小品を踊った。一口に言うのは簡単だが、会場の熱気は尋常ではない。

しかしこのガラ公演という形式、いかにも二〇世紀ならではの催しという感じがするのだが、じつはバレエの世界ではずいぶん古い伝統をもっているのである。一八世紀中葉、かのカサノヴァがヨーロッパを旅行して稀代の女道楽を遂行していた最中、たまたまパリで見たのもガラ公演の一つだったのではないかと思う。

舞台では、足首までの長いマントを着た男性が何かしていて、観客は「伸びる！ 伸びる！」と騒いでいる。そういえば、少し背丈が高くなったように見えたど、『カサノヴァ回想録』にある。次に女性のダンサーが登場して激しく舞台を跳ね回り、あっけにとられているうちに幕が下りた。

このときカサノヴァが見たのが、至芸をもってバレエの神様といわれたデュプレ、そして一世を風靡してカマルゴ・ファッションまで登場させたカマルゴである。一七五〇年のことだ。

[42] 第8回 世界バレエ・フェスティバル

～未来も描いたガラ公演～

1997年8月22日 東京新聞 夕刊

カマルゴは、それまで男性しかなかった跳躍をやったのけ、一躍スターになったのだが、スカート丈を短くして足首を見せたことで、それ以上に世間を騒がせた。カサノヴァが彼女の舞台を見たときも、隣の席の男が「じつは下着をつけていないんだよ」とささやく。カサノヴァが「どうしてそんなことが分かるの」とたずねると、「そりゃあ分かるよ。あんた外国人だね」と得意気に言ったという。パリジャンの訛知りをひけらかしたのだが、こともあるうに、あのカサノヴァに向かつて言ったところが面白い。

時代下って今世紀初頭。ディアギレフのバレエ・リュスがヨーロッパをはじめ世界中でセンセーションを巻き起こしたのも、ガラもしくはバレエ・コンサート形式の公演である。

この公演の何が刺激的だったかと言えば、まったく趣向のちがう演目が抱き合わせになっている点だ。優美なバレエと『グッタン人の踊り』のようなエキゾチックな躍動感が並んでいる。

観客の美意識が揺れて、どうしようもなくなつた熱狂の極みから、たとえばニジンスキーの『牧神の午後』のような独創的な振付や、『薔薇の精』の跳躍のような超絶技巧が生み出されたのだと言ってもいい。バレエというのは、生きた興奮に駆

[42] 第8回 世界バレエ・フェスティバル

～未来も描いたガラ公演～

1997年8月22日 東京新聞 夕刊

り立てられる瞬間の芸術でもある。

たしかにその場限りの熱狂かもしれないが、しかしバレエの歴史をひもとくと、こうしたインパクトの強いガラ公演が流行した後は、かならず中身の濃い成果がもたらされたのも事実である。

一八世紀の棲半には、スウェーデン、デンマーク、ロシアなど各国に、王立、帝室のバレエ団、付属の舞踊学校が創立されているし、またノヴェールがバレエ・ダクシオン、つまり劇的バレエを提唱して芸術性の高い作品への意識が高まったのも、この時代のことである。

バレエ・リュスが果たした役割もことばで言い尽くせない。南北アメリカ両大陸、オーストラリアにいたるまで、世界中くまなくバレエが広まったのは、この株興業の小グループがまいた種から育ったものだ。

* * *

しかしそんな歴史にも、日本の世界バレエフェスティバルほど規模が大きいガラは出現した例がない。とすれば、そこに将来のバレエのビジョンを読み取ることも可能ではないだろうか。

今回は中南米出身のダンサーが、思いの外の感興を巻き起こした。赤銅色の肌を輝かせ、何とも朗らかな躍動感で古典を踊る彼らは、バレエはも

[42] 第8回 世界バレエ・フェスティバル

～未来も描いたガラ公演～

1997年8月22日 東京新聞 夕刊

はや白人の特権的エレガンスを超えたと、全身で叫んでいるようだ。

その一方で、ブテイ振付の『アルルの女』や、ノイマイヤー振付『椿姫』、マクミランの『マノン』でベテランのダンサーが見せた表現も、文学に劣らない感動と説得力があった。私たちはやはり、現代の舞踊言語で人の心の奥をうがった物語を求めているのだ。

だが、声をもたないバレエは、それゆえにかえって想像力を刺激することもある。イヴリン・ハートとレックス・ハリソンが踊ったネブラータ振付の『レント・アパッショナート』（87年初演）や、マラーホフが踊ったシヨルツ振付『ノーテーション』（97年初演）などの抽象バレエは、深い情感を漂わせつつ、移りゆく風景にも似た多様な感興を描き出す。言語があれば、言語の語るもの意味は限定される。だが踊る肉体からは、観客は自分だけの物語を想記することが可能なのである。

多くの才能が出会うこの祭典では、観客よりもダンサーたち自身が感動し、たがいに啓発しあっているようにも見えた。そこからバレエの未来に目を向けるとすれば、最も期待したいのは才能ある振付家の出現だ。しかし、それも決して望み薄の話ではない。